
刹那の火

橘 太智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那の火

【ZPDF】

Z1619Z

【作者名】

橋 太智

【あらすじ】

戦争中についたかもしぬ、或る逸話。

(前書き)

戦争中にあつたかもしない、或る逸話。

おーーーーーん

/

大氣を劈くサイレンの音が鳴り響く。

私はただ戦慄した。

訳も解らず、恥も外聞も無く、何もかも捨てて逃げていた。

熱い、熱い、熱い
！

真つ赤な炎が滝のように流れ落ちる異様。
風に煽られた火の吹雪が横殴りに肌を刺す。
阿鼻叫喚の地獄の中を、街の人々が逃げ惑う。

消防訓練は受けたけれど、もう火を消すどころの話じやない。
一刻も早くこの場から逃げなければ。
でも、何処へ逃げればいい？

四方八方、見渡す限りに火の海だ。

視界には高熱の赤しか映らない。

真っ黒な空には無数の機影が飛び交っている。

その中で、

「 つ！？」

誰かが何かを叫んでいる姿が見えた。

どうでもいい事だと、一瞬思った。それよりも、早くこの場を離れなければと。

人としての道徳なんてどうでもいい。

原始の本能に従つて、ただ生き延びる事だけを考える。

そうしようと決めた瞬間、

「早くしろ！」

男の声が聴こえた。

どうでもいい事だった。

なのに、何故か私は、もう一度その方向を振り返った。

「 あ

大きな建物の玄関が、脇の折れた柱から崩れ落ちようとしている。それを一人の男が手で必死に支えようとしている。

莫迦な、と思う。

そんな事、出来る筈がない。

仮に可能だつたとしても、もう無駄だ。だつてその家は既に炎に包まれている。

だが、私は次の瞬間に理解した。

家の周りは火だらけで、もう出入りできる場所はその玄関しかない。

そして、その家の中からいくつもの子どもの姿と声が

「大丈夫ですか！？」

「な、あんた つ！？」

男が目を瞠つて駆け寄つてきた私の姿を見つめていた。私は、その彼以上に自身のその行為に驚きながら、

「中に居る子どもは！？ あと、何人ですか！？」
「あ……あと一人だ！」

聞くや否や、脇目も振らずに中へ飛び込んだ。

目と喉が焼け付しそうになりながら、私は炎の中を駆け抜ける。勘だけを頼りに、ぐるぐると家の中を眺め回す。

子どもはすぐに見つかった。

六、七歳ほどの、小さな女の子。少し奥に入ったところの居間で、

防空ずきんを被つた格好で蹲つていた。

「ええいっ！」

話し掛けている暇は無い。

まだ生きていると見るや子どもの服の後ろ襟を引っ掴み、すぐさま来た道を引き返す。

途中、炎に朽ちた天井ががらがらと落ちてきた。

火事場の馬鹿力というのは本当の事だ。私は熱いとも感じられず、邪魔なそれを殴り蹴りつつとにかく走った。

「子どもは見つけた！ 早く逃げるぞー！」

「すまねえ、恩に着るー。」

成功だ。

ひとつ命が生き残った瞬間だった。

しかし、喜んでいる場合じやない。

そんな感情は微塵も起きこらはず、私はすぐさま次の行動を考える。

道に出たといひで子どもを離し、今度こそ早く逃げようとして

玄関の折れた柱が、横の巨大な壁と一緒になつて落ちてく。
それを見た私は

「ぬ、ぐ　　つーー！」

「あんたつーー？」

その倒壊する壁を支えに走っていた。

正直、何がなんだか訳が分からなかつた。
あるいは、私はどうに気が触れているのかもしぬなかつた。

見ず知らずの家族の為に、なんで、こんな

「ダメだ！　もたないつーー！」

凄まじい重圧が圧し掛かる。

あと一分も耐えられない事を、掌が訴えていた。

それを確信した私が発した言葉は、

「親父さん、先に行け　　つーー！」

「な、なんだつてーー？」

だから、なんで私は、こんな事を

「ここはもう駄目だ！ 先に離れうつー」

人間一人の力では支えきる事は不可能。
しかし、二人が手を離せば倒壊する家の下敷きになる。
無論、私一人で支える事は出来ないが、体躯に勝る私の方がまだ
確実だ。

片方が逃れるまでの、僅かな時間を稼ぐくらいの事は

「二人とも死ぬ事はない！ 早く行け！」

「し、しかし
！？」

えーん、えーん。

刹那、

私たちは炎の轟音に搔き消されそうな、その声を聴いた。

立ち尽くし、泣き続ける小さな少女。

歯を喰いしばり、けれど瞳に絶望の色を浮かべる父親。

……私は、全身全靈を懸けて、声の限りに叫んだ。

「何してやの馬鹿親父っ！ 早く娘を助けに行けええつ……！」

微かな逡巡。
僅かな沈黙。

永遠とも思われたその一瞬、悲壯な顔を私に見せた父親は、

「すまないつ……」

その後ろ姿を、私は確かにこの眼へと焼き付けた。

泣き腫らす幼い少女がその逞しい腕に抱かれる光景を確かに見た。

そして私は、

「は

私は、確かに笑っていた。

田を剥いたまま口の端を吊り上げる私は、きっと凄絶なまでの笑顔だった事だろう。

何故、この私はこんな事をしたのか。

何故、この街がこんなふうに焼かれなければならなかつたのか。

何故、この世界にこんな地獄が有り得たのか。

私には、何も解らない。

私は、いつたい何だつたのか。

倒壊する炎の家屋に押し潰される。

その一瞬に、振り返らなくていいものを振り返つた父娘の姿が、眼の端に視えた。

彼らが生き残れるかどうかは解らない。

数分の後には、彼らも街の炎に呑まれているかもしけない。

私がした事が確かに報われるとは思わないし、

救われた彼らが真に幸運だった

とは限らない。

だが、それでも……

「生きろ つ……！」

朱に沈むその瞬間。

この私は彼らに向かって、炎のよつに笑う事を選んでいた

/ 刹那の火・了

(後書き)

何か書かなければ、と思い立つて書き上げました。

名もなき一人の人間の心にあつた、

刹那に燃え上がった炎を感じて頂けたならば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1619n/>

刹那の火

2010年10月10日20時06分発行